

孔子論図・弥谷寺蔵三宝院流聖教類・宋刊写刻体経典

— 補遺三題 —

牧 野 和 夫

はじめに

狭隘な個人的な視野に展開する個々の中世の事物への関心を絶えず喚起しつつ調査及び収集を継続してきたが、同時並行的に整理分類することの困難さは想定外の域に達して増大するばかりである。纏まる「ことがら」は取り敢えず開いて文章化してきた。ここに三つの局面(側面の一面)から窺い知ることをえた新知見を新たに補遺として記述する。

一、「孔子論」図

孔子・項託問答話については、牧野「孔子論」一卷附『台

宗三大部外勘抄』(『東横国文学』18号、1986、後に『中世の説話と学問』、1991、和泉書院刊収録) 公刊以降、「新出『小児論』二種紹介」(『実践国文学』70号 2006・10) や「日本に舶載された〈孔子童子問答話〉に関する二、三の問題」(日本台湾共同ワークショップ、2007・6・3 於 京大大会館、後に同題の論文を『仏教文献と文学』(2008・9 国際仏教学大学院大学フロンティア実行委員会 所収) に至る一連の諸論において我国残存資料(近代を含む)の蒐集、本文の分類に終始してきたが、「新出『小児論』二種紹介」(『実践国文学』70号 平成18・10)において、始めて副題として「帯図にふれつつ」を掲げた。雑字系日用幼学字書の多くがその首に「小児論」図と本文を上図下文形式で収めていたからである。

上図下文形式の「小兒論」が明代から清代にかけて普く展開していたことに留意した報告であった。其の後、金文京氏「敦煌文書が語る文学史―辺境文学の普遍性―」（『しにか』1998・7）の推測（「孔子項託相問の図は、漢代画像石に認められるのではないか」という）に導かれた比較を試みたのであるが、手がかりは、『和人格爾後漢壁画墓』（1978年 文物出版社）の「孔子」に対面する「児童」の榜書「項橐」二文字の残画「」（模写図による）にあった。「車（輪）を押す（曳く）小兒」に着目した図像分析を若干行ったのが、2007年のシンポジウム「仏教文献と文学」における口頭発表であった。ここに我国残存資料として「孔子項託問答話」を画題にしたと目しうる新たな一図を提示したい。

まず、『今昔物語集』所収話を除く我国残存資料本文の概略を旧稿に従い再度、分類整理する。

a 日本残存資料「孔子論」

かつて敦煌発現百周年記念国際シンポジウム（於北京）において日本残存資料の調査結果に基づき口頭発表を試みた。その内容を活字化した「敦煌藏経洞蔵『孔子項託相問書』類の日本伝来・受容について」（『敦煌文献論集』2001・5 遼寧人民出版社刊）に管見に入ることを得

た孔子項託問答説話として日本現存の刊・写本主要六本並びに抄出一本合計七本を取り上げたことがある。既に逸文一則が『五常内義抄』などに「孔子論云」として引用されていることは知られていたが、多くの伝本が我国の石室裡に死蔵されていたのである。

(1) 高野山大学図書館蔵・（持明院寄託）（16世紀、室町後期頃）写『孔子論』大一冊

(2) 醍醐寺蔵（17世紀、近世初）写『孔兒論』一冊

(3) 家蔵故阿部隆一氏旧蔵（17〜18世紀、近世）写『孔子論』一冊

(4) 慶安四年刊（明暦三年後印本もある）『類雑集』卷九所収「孔子論」

(5) 日本宮城県立図書館伊達文庫蔵（18世紀）写『孔子論』…抄出

(6) 歴史民俗博物館蔵大永五年写『源氏供養附三十六歌仙開眼供養表白・明法抄・孔子論』

(7) 日本東京大学総合図書館蔵『瑠玉集 付孔子論』一冊

b 「雑字」系類書所収「小兒論」

その後、「雑字」系類書と『小兒論』テキスト―「雑字」

系類書の二伝本・内閣文庫蔵明刊〔新鐫増補／類纂摘要〕鰲頭雜字』所収『小兒論』紹介―〔『実践国文学』68号平成17・10〕、「日本残存資料から見た『小兒論』：雑字系資料―日本中世の〴〵論（対話体）〴〵という〴〵梓組み〴〵の受容について―」（2005年2月25日第一回東亜寓言國際會議、同論文集所収拙稿）にいくつかの引文を越南本三本と対照して概要を記したので、多くは省略するが、結論として言いうることは次の点である。内閣文庫蔵『新鐫増補／類纂摘要〕鰲頭雜字』所収『小兒論』は、現在、日本現存の写本には見出せず、既に先学の紹介済みの資料として挙げられたベトナムの河内市越南国家社会科学中心漢喃研究院図書館蔵、越南本「小兒論」伝存三本（王昆吾氏『从敦煌学到域外汉文学』商務印書館出版所収2003）や「新編小兒難孔子」（王重民他編『敦煌變文集』卷三「孔子項託相問書」附録二）に系統を同じくするものである。特に京都大学人文本は越南乙本にほぼ同文である。概して、越南三本は「増補幼學須知雜字大全」所収「小兒論」系統の本文といふことができる。

〴〵雜字〴〵系日用類書所収「小兒論」は、その広範な流布を予想しうる点で、影響するところは多大であろうと思われる。越南本も明代以降の中越の交易に伴う移入の「産物」と考えるべきかもしれない。中国において地方の古老伝誦

の故事として〴〵小兒論〴〵系統の「昔話」が報告されていることも、『雜字』などが村塾の教科書として古くより流布していたことと係わるかもしれない（張鴻勳氏「孔子項託相問書」故事傳承研究）〔『敦煌俗文学研究』甘肅教育出版社、2002年9月 31〜42頁〕に）。とくに、明代以降の出版文化の拡大と関連するものであるろう。

「小兒論」収録の『雜字』類の本文の系統分類を再録するならば、次の通りである。

【甲類】

- 1 内閣文庫蔵『新鐫増補／類纂〕鰲頭雜字』所収「小兒論」

【乙類①種】

- 2 京都大学人文研蔵『増廣幼學須知雜字大全』所収「小兒論」
- 3 越南 甲本『昔仲尼師項橐』
- 4 越南 乙本 佚名本
- 5 越南 丙本『孔子項橐問答書』
- 6 スウェーデン王立図書館蔵A本『東園雜字大全』所収「小兒論」
- 7 スウェーデン王立図書館蔵B本『東園雜字』所収「小兒論」

【乙類②種】

8 高田時雄氏蔵『増廣幼學須知鰲頭雜字大全』所収「小兒論」

9 京都産業大学図書館蔵『増補素翁指掌雜著全集』所収「小兒論」

10 『敦煌変文校注』卷三所収「新編小兒難孔子」

11 西江大学校図書館蔵『隨記』所収「夫子遇小兒論世益」

【丙類】

12 内閣文庫蔵『孔聖全書』卷三十四所収「孔子出遊逢小兒論」

13 『敦煌変文校注』卷三所収『歷朝故事統宗』卷九所収「小兒論」

元和九年（一六二二）の跋文を備える狩野重長（一溪）の編著『後素集』は、卷一の後半から卷三の諸画題の解説がこの編著の「眼目であり」、聖賢から雑に至る三十二項目、「六百九十件余の画題を掲げている」。まさに「製作鑑賞鑑定の基礎知識を与えるもので」「この時代の絵画と文学との関わりを考える上で注目すべき内容である」とされ、『翰林五鳳集』と並んで中世末期・近世初期の画題研究の上で殆ど唯一の貴重な手懸り」を与えるものである、という（山

崎誠氏「後素集とその研究（上）」（『国文学研究資料館調査研究報告』による）。この「聖賢」の項に「孔子論図」という画題が挙げられ「兒子土ノ城ヲ作り居タル所へ、孔子車ニ乗テ行給フ時、小兒孔子ト問答。」との記述がある。既に周知のことであるが、孔子・項託問答の図であることは明瞭である。我国の中世末・近世初期に画題として「孔子論」の場面が絵画化されていたことになる。

編著者一溪の実父は狩野松栄の門下で一翁内膳である。ひろく狩野派の系譜に探るのが筋である。「新出『小兒論』二種紹介」（『実践国文学』70号）公刊直後に『後素集』の当該記事に逢着し折りに触れ狩野派の画集や展覧図録などに探ったのであるが、杳として「孔子論」というべき図像の行方を知ることが出来ずにいた。全くの門外漢が近時、漸くに一図を拾い、候補の一点として次の一図を提示したい。あくまでも可能性のある、検討すべき図のひとつと考えているのみで、確証とすべき文字資料はない。（図1）

この図は、『尾形家絵画資料』図版篇（1981 西日本文化協会）所収の通番2044に当たる。項目「唐兒童遊戲」に分類された一群の図の中の一点である。前掲『後素集』にも「兒童」の項目がある。聡明な童子との問答話としては唯一「君平戲兒図」という画題が掲載されるが、孔君平と楊氏の子供一人との問答、と考えるべきで、通番

従者の子供と同じ背丈に描かれるのは、一軸に両輪を備えた車に座した姿か、その前に立姿で戯れる三人の唐子が描かれる。左に従者が天蓋を指しかける。

黒田藩の御用絵師尾形伸由に始まる代々の尾形家の絵師が製作した粉本資料群を網羅的に整理分類したものが『尾形家絵画資料』である。初代伸由が狩野探幽に師事して以来、狩野派（鍛冶橋家・駿河台家など）に結ぶことの深い絵師ばかりで、その粉本は狩野派に連なるものが多いようである。「尾形家資料はその大半が同家絵師の製作にかかると。ただし、門人の制作分も少なからず含まれ、さらにごく少数の、尾形家とは無縁な絵師の本画（二七五五ほか）も例外的に含まれる。」（後藤耕二氏）という。

通番2044が尾形家代々のいづれの手にかかるとか、或いはその他の絵師にかかるとか、本書の解説には手がかりとなる記述はなく、何時ごろの粉本であるか、これ以上の推測はできないが、狩野派と少なからずゆかりのある粉本か、と考える。

我国に残存した孔子・項託問答話の室町・近世前期書写のテキスト（寺院僧坊の資料）がほぼすべて小題・尾題を「孔子論」に作ることは、室町末・近世初頃の画題研究資料『後素集』が画題を「孔子論」としていることと緊密な関係がある、と考えるべきであろう。残念ながら「孔子論」

図1

2044が小児を三人描くことに注意するならば、「君平戯児図」ではない。後述するが、孔子・項託の間答話は三人の小児を描く（約束事）があったようである。孔子かと覚しい人物（図像的に正面を向いた孔子図と適う。童子や

と小題した本文に係る図は管見に入るをえない現状からは、この狩野派に淵源をもちそうな粉本を『後素集』所収画題「孔子論」に直ちに結びつけることはできない。

一方の日本舶載資料「雑字」系幼学日用類書の上図下文の事例から若干の推測を加えたい。そのほとんどが小題・尾題を「小児論」と作るが、図を基準に類別するならば、高田時雄氏蔵『増廣幼學須知鰲頭雑字大全』所収「小児論」上図（図2）を先ず挙げるべきであろう。スウェーデン国立図書館蔵A本『東園雑字大全』所収「小児論」・スウェーデン国立図書館蔵B本『東園雑字』所収「小児論」は、この系統である。孔子の面相や頭髮・被り物部分に各々相異なるものの、構図は同じである。土の城壁近くに三人の童子を描く。従者が一軸両輪の手押し車を押ししているのが特徴である。

いまひとつの系統は、京都大学人文研蔵『増廣幼學須知雑字大全』所収「小児論」・ABAJ特選Web古書店V01・13『増補素翁指掌雜著全集』所収「小児論」である。京大人文研蔵本は土の城壁近くに三人の童子を描くのに対してABAJ本は従者と二人の童子の計三人となる点大異なる相違がある。この系統は、従者が一軸両輪の車を曳いているのが特徴である（参考図としてABAJ本の模写を掲載する。図2（右））。

先述の粉本を考える際に「小児論」系のこれらの図で興味深い点は、高田時雄氏蔵『増廣幼學須知鰲頭雑字大全』所収「小児論」上図・スウェーデン国立図書館蔵A本『東園雑字大全』所収「小児論」を始めすべて（ABAJ本は従者を加えて三人）、児童三人が立姿で描かれていることであり、特に高田時雄氏蔵本・スウェーデン国立図書館蔵「東園雑字」本の小児一人が右手を掲げ、左手は袖口あたりで握る仕草で描かれている点である。この仕草の童子を尾形家蔵の通番2044の粉本に全く同じ仕草で踊るかの如き唐児として確認できるのである。ここに、高田氏蔵本の三人の童子（図3）と尾形家資料通番2044の三人の童子の図柄の比較対照を掲載する。なお、尾形家の図中の礼拝する児童のみ、左右反転させて配したことを附記する。

かくて尾形家絵画資料の通番2044の一点は、我国舶載「雑字」系幼学字書の明後期以降の図様にも適うことが明瞭となった（但し、孔子像についての検討は省いた）。憶測を許していただくならば、我国へ舶載された「雑字」系の幼学日用字書に「孔子論」と小題・尾題した本文を下段にして上図には三人の童子（仕草などは三人とも立姿）と孔子（従者に天蓋を持たせて正面の孔子、これは狩野派の創作上の配慮とも）を描いた図様を配した一点があった

図2

(左) 高田時雄氏蔵本、(右) A B A J本

図3 高田蔵本と尾形家資料の対照。
(右) 尾形家資料通番2044、(左) 高田氏蔵本

のではないか。このように考えることは、無謀であろうか。既に我国中世の禪林を始めとした佛教諸流に亘る初学・幼学の世界に明洪武辛亥の木記を持つ「雑字」系の幼学日用字書類が舶載され来朝刻工伯壽などの手に係り覆刊されたことなど、その受容について川瀬一馬氏『五山版の研究』(1970・3)の記述に拠り指摘したことがあるので、ここには省く(「雑字」系類書と『小兒論』テキスト)〔『実践国文学』〕。ご参照いただければ幸いです。明代の幼

学字書の上図下文などの形式を介して図像とテキストが一面の上下に配された形で舶載され、各々受容の過程で図と文が相別れた後は、図像の方は殆ど辿り返すことのできない画題・粉本としてわずかに近世初期まで残り（尾形家の粉本）、テキストの方は寺院僧坊の一隅に誰一人手に取ることもない古書（『類雑集』など）の一丁分に生き延びていたことになるのである。敦煌藏経洞発現後、百十有余の歳月を経て日本の地で「孔子論」の図・文が新たに相見えに至ったことの不思議に驚きを禁じ得ないのであるが、あくまでも尾形家藏粉本資料の通番204が「孔子論」図と確定できた、としての話である。

二、弥谷寺藏三宝院流聖教類の伝来について

本誌所載旧稿のや口頭発表資料などに「照海が一括伝来したか」と記して弥谷寺藏三宝院流聖教類の伝来について若干触れたが、誤解を生じる可能性も強く、ここに次の点を明らかにしておきたい。二人（乃至は更に複数）の時代を著しく異にした「照海」が関心の赴く線上に同時に浮上してきたからである（円海などはその顕著な例である）。

弥谷寺藏三宝院流聖教類については、田中博美氏「弥谷寺所藏の三宝院流聖教（甲）」（『醍醐寺文化財研究紀要』

8号 1986）の報告があり、「弥谷寺所藏の聖教は」「小野三宝院流」と「新安祥寺流」の聖教に「大きく二つに分けることが出来る」とされ、その「三宝院流のなかでも質・量ともに中心となるのは本圓が暦応から貞治ごろまでの三十年間に書写した」聖教である、というのである。本圓の名は醍醐寺所藏聖教、たとえば第三四七函の五『禅林寺静遍僧都都秘記成賢口決 一卷』や四二九函の七『灌頂』の奥書を提示し、さらに『高野山西南院所藏聖教類蒐集史料目録』に著録の『三宝院聖教目録私』なる一冊の奥書を掲出し、事相・教相に亘る本圓の著述を列記している。真言宗における大変重要な学僧であることを確認して、次のように指摘された。「今まで自筆本の存在は知られていなかったのではないだろうか。」と。

本円については、『禅林寺静遍僧都都秘記成賢口決 一卷』の貞和四年の校合識語に「東寺末資本圓」と記述するように、小野流の八幡善法寺の学僧である。一例を挙げれば『東寺観智院金剛藏聖教目録 五』（昭和54・3）P. 254・255の『灌頂印明決』の奥書に

〔奥書〕建武四年八月廿一日任所承註本文畢

金剛乘沙門性心（春秋／五十二）

此抄先師入滅之後為助自行竊雖記之尚恐／冥慮入干火灼了其夜夢見先師持紙携杖／告弟子日汝之所抄甚以随喜燒之不

可然早令起草／可清書此紙此料紙者從 大師所給也云々忽驚／夢中之巖訓再纂軌之要文其後曆応二／年八月廿七日又感夢想速疾成佛一章加入之／ 已上御抄批

曆応第二曆暮秋中旬之候賜師主御自／筆之本謹染筆畢此鈔者秘密之肝心遮／那之腦膽也努力々々不可及外見□□□□□／宛如守眼肝而已

小野末資金剛本円

(以上本奥書)

応安四年潤三月五日於東寺觀智院禪窓／以善法寺御本令書寫了披先師遺鈔如／再觀面会可喜々々 権少僧都賢寶 生年卅九

(以下略)

と東寺賢寶が記すように、賢寶の先師である生駒の性心、その門下の本圓であり、賢寶の師事していたことも知られている。櫛田良洪氏『続真言密教成立過程の研究』(昭和54・3山喜房佛書林 頁331)には、次のような記述がある。「本円は男山八幡善法寺に止住した僧で、一朶宝より仁和寺御流を相承した人であった。賢寶は康安元年六月二十九歳の頃この本円より八幡善法寺で菩提心論灌頂を授けられたことがある。そこで応安三年(建徳元)正月二十四日善法寺方丈で長老本円より教えを受け、更に六月十九日八幡善法寺で長老現証や本円によって御流の付法を

受けた。こうして応安四年八月には本円に師事し、九月には上乘院宮より故上人が相承した内に欠けたものを補い、十二月二十二日には立派に野月を相承した。応安五年十月長老現証より「一部沢見抄」の伝受を受けた。さらに同六年八月には「不動護摩私記」の伝受をうけ、七年五月には善法寺長老より「許可略支度」を相伝書写している。その他、永和三年三月、同四年三月、同四年九月、永徳元年八月と相次いで秘籍の伝受をうけた。こうして賢宝は仁和寺御流の相承者として上乘院御所に参入し、時には招かれて室町殿で仁王經修法の式衆にも加わった。……こうして乗朝、現証、本円、顕覚などから善法寺蔵本を普く提示され、仁和寺御流を洩れなく相承していった。」

弥谷寺蔵『事相書籍目録』一卷には「賢寶云」として賢寶の注記を追筆し、明らかに賢寶手沢(経由)を示し、東寺觀智院に係る典籍であり、ここに云うところの照海は、「照海授乘海印信」五紙一包の五「血脈」の「……善法寺性心 同寺本圓 觀智院賢寶 ……同院権僧正宗泉 善法寺慈雄 觀智院権僧正真海 善法寺昭海 乘海」と次第する八幡善法寺「照海」で天文七年頃の生存が確認できる。即ち、弥谷寺蔵三宝院聖教は、「照海—乘海」と相承された一群の典籍類(本圓に連なる觀智院経由のもの)であり、「照海—乘海」の次第(天文期)までは八幡善法寺・東寺

観智院の交流の圏内に存在していたものである。従って、東寺観智院賢寶に直結する典籍群を含む東寺伝来のものとしての扱が必要となる。

かつて興味深い典籍書写識語中に拾う「照海」として旧稿の所々に留意した、南北朝期の「照海」とは別人であることを明記しておく。

八幡善法寺・東寺観智院の交流の圏内に存在した弥谷寺蔵の印信・典籍類に四天王寺勝鬘院円珠に連なる僧「本空」の四天王寺止住の事実が認められることは、延慶本『平家物語』の独自記事に認められる「四天王寺」止住の「本空」を考える上で看過しがたいことである。詳細は口頭発表などを予定している。

三、終わりに―自写經典の刊刻化…写刻体と刻工

前稿『自写』經典の宋の地における開版小考』に示すべき事例を逸したので加えたい。「仁遜」の「自写」に係る東禅寺版「長阿含經」（千字文函番号「履」十卷）・「十誦律」（千字文函番号「職」十卷）の合計二十卷がある。この題記・尾題記は本源寺蔵東禅寺版の同版同經典が首尾欠のため存在せず、『金沢文庫蔵宋版一切経目錄』にも知恩院蔵宋版一切経にも認められず、『醍醐寺蔵宋版一切経

目錄』公刊によって明らかとなった事例である。又、「詳勘経沙門元興」が「寫此函」と刻記した東禅寺版「出曜經」（千字文函番号「宮」十卷）も、写刻体を残す。

元来、「自写」（日本では「自ら手づから写」と作ることが多い）の功德を以て願主の願意成就を祈念するもので、おそらく刊経盛行以前の卷子装の書写経に多く認められる傾向のものであったか、と推測できる。福州版大藏経を特徴づける経摺装について言えば、卷子本の装丁を極力残す折り本装として独特の形態である。福州版に即していえば、巻末尾から毎6行で折り疊んでいくと自ずと出来上がる装丁。前表紙を含めた一紙で包背装とし、中央に金字外（経題を配するように工夫（観音開きの形態）されているが、包背装内にも巻末の後表紙を備える為、後表紙が重複することになり、前表紙を観音開きに左右に開くと、その後表紙が現れることになる。押さえ竹・経紐も卷子装の名残である。卷子装を頑なに残す東禅寺版刊行初期には、「自写」の経巻が「版下」に使われ、写刻体を残す傾向が少なからずあったのではないかと考えられる。

なお、一点の可能性について付言しておきたい。慶政の唐本大藏経補刻事業と商客金源三の一党との係わりを想定（『南岳衡山と聖徳太子信仰』〈2018・6 勉誠出版〉所収拙文）し、その連繫を慶政の入宋以前に遡らせるならば、

慶政帰国時に将来した唐本五部大乘経に対する補刻施財などの可能性も憶測ではあるものの一考に値するのではないか、と思うのである。

* * *

本稿の一部は、科研費・基盤B（課題番号：26284040）の助成に拠る成果である。また、「孔子論図」については、調査会「陝北地方の画像石と革命聖地」（8／5～8／9）の「漢代画像石」セミナーでの同題発表の内容と同じである。席上御教示賜わった諸氏に謝意を表す。

（まきの かずお・実践女子大学教授）